

「ぜんぜん美しい」という言い方が実は正しい？

本来「ぜんぜん」という言葉は後に続く否定の言葉とセットで使われるべき語だとよく言われます。しかし、それは本当かな？と異を唱える言語学者がいます。この学者は次のように言っています。

「ぜんぜん美しい」「ぜんぜんよかった」という言い方は戦前(昭和初期まで)は自然に使われていたというのです。その根拠となるものを3例挙げています。

- ① 昭和8年の国定教科書の中に『むずかしい数学はぜんぜん忘れられてしまっている』という表記がある。
 - ② 夏目漱石の小説「坊っちゃん」の中に『ぜんぜん悪いです』という下りがある。
 - ③ 森 鴎外の小説「怪人」の中にも『ぜんぜん同じことである』という文がある。
- というのです。

どれどれと思い、私は夏目漱石を調べてみました。角川文庫の文庫本「坊っちゃん」を思い切って購入しました。280円でした。

67ページの下3行目にありました。職員会議の一場面で熱血主人公の発言です。『いたい生徒が全然わるいです。どうしてもあやませなくっちゃあ、癖になります…』

森 鴎外は小遣いの関係で買っていません。

ともあれ、「ぜんぜん」の使い方が最近乱れているように言われているが、本来の使い方にもどっただけ、戦前教育を受けた人たちには違和感はないのだとこの学者は言うのです。

おじいちゃんやおばあちゃん（70歳以上）がいるご家庭で「ぜんぜん」の使い方について話してみたらいかがですか。意外と中学生とは「話がぜんぜん通じる」かも知れません。

